

杜甫の百花潭莊

— 浣花草堂のもう一つの顔 —

松原 朗

杜甫は乾元二年（七五九）の十月の末に秦州を發し、同谷を経て、年末に成都に辿り着いた。そして翌上元元年の春に、成都の西の郊外、浣花溪の流れるほとりに草堂を營むことになる。そのいわゆる浣花草堂は、當然のことながら、困窮した漂泊者の身の丈にあった簡素なものだったと考えられてきた。またそもそも「草堂」「茅屋」なる語が、瓦葺きではない質素な家屋を意味するものでもあった。

しかしながら浣花草堂は、これまで漠然と考えられてきたような簡素なものではなかったらしい。その一端については、「杜甫と裴冕——成都草堂の造營をめぐる一つの覺書——」（『專修人文論集』九一號、二〇一二年。以下「前稿」）に私見を述べている。本稿は、それについての補稿である。

* 以下便宜的に、建物そのものを指すときは「茅屋」、敷地ま

で含めた全體を指すときは「草堂」と稱して用い分ける。なお詩題に添える四桁の數字は、仇兆鰲『杜詩詳注』所收の詩篇に頭から付した作品番號で、二〇一五年刊行予定の『杜甫詩全譯注（假稱）』（講談社學術文庫）に採用されるものである。

（一）浣花草堂の規模

杜甫が成都で手に入れた草堂は、雨露を防ぐ一棟の茅屋だけのものではなく、ゆくゆくは己れの審美的要求を満足させるだけの余地を備えていた。そのことは、杜甫が草堂を造營するに當たって、多くの人々から提供された植栽や調度の豊富さからも想像できる。

成都府の司馬（從四品下）の官にあり、杜甫の血縁（表弟）

でもあった「王十五司馬」は、茅屋を建てるための資金を用立てた〔王十五司馬弟出郭相訪兼遺營茅屋費〕0386)。そして「蕭八明府堤」「韋二明府續」「何十一少府邕」「韋少府班」「徐卿」の面々からは、それぞれ「桃の苗木」「綿竹」「椴木の苗木」「松樹の苗木」「果樹の苗木」が提供された。桃の苗木だけでも百本あり、数年後には草堂の春を美しく色取り、初夏には豊かな實りをもたらすはずだった。また「韋少府班」には、松の苗木の他に大邑の窯で焼かれた碗を所望した。それは當時の最先端の技術で焼かれた薄くて硬質な磁器である。それは草堂に大事な客を迎えた時に、卓上を飾るのに用いられるのだろう。こうした植栽の数々、あるいは大邑の瓷碗は、雨露から身を庇うだけの小さな茅屋に住まう貧者には無用の長物である。杜甫の草堂は當初より、これらが必要とするほどの豊かな世界を目標に造營されたと考えられるしかない。

* 前稿では、杜甫の詩には草堂造營の最も重要な前提条件となる土地取得の件が見えないこと、また取得した土地が相當の規模であることから、隠された土地の提供者がいることを想定し、その人物はかつて鳳翔の行在所で結識し、この時は成都尹・西川節度使として成都の最高権力者だった裴冕と推定した。

いま樹木に注目してみても、草堂の敷地の廣さを窺い知るこ

杜甫の百花潭莊（松原）

とができる。一例として桃樹は、間隔を前後左右とも八メートルあけ、一〇アール当たり一六本となるのが望ましいとされる。杜甫は縣令の蕭八實から桃樹の苗木を百本貰い受けている〔88〕に「奉乞桃栽一百根」。もし杜甫がこの間隔で桃樹を植えたとなると、これだけで六〇アール（8.6ヘクタール）余り、高校のグラウンドなみのほぼ八〇メートル四方の面積が必要となる。「桃栗三年柿七年」の成語があるように桃の生育はわずか三年で收穫できるほどに速いので、當初から十分な間隔をとって植樹されたことであろう。また縣令の何十一邕から椴樹を貰い受けているが、それは三年後には十畝の木陰をつくることが期待されていた（「飽聞椴木三年大、與致溪邊十畝陰」。一畝は約六アール弱、十畝であれば約六〇アールの面積となる。桃樹と椴樹を合わせただけでも一二〇アール（3600坪）の面積に達する。しかも草堂にはこればかりではなく、さらに綿竹も松も新たに植えられたのである。

* * * * *

草堂の規模の大きさを窺わせる詩を、いくつか読んでみたい。草堂を去って長江を雲安まで下った時期の作に「杜鵑」〔88〕があり、その一節に「我昔遊錦城、結廬錦水邊。有竹一頃餘、喬木上參天」とある。錦水のほとりに結んだ草堂には、一頃の竹林があった。一頃（一〇〇畝）は六〇〇アール弱である。この「一頃餘」は概數で、しかも「喬木上參天」とともに誇張さ

れた對句表現の中にもあるので、そのまま實數と見ることはできない。とはいえ杜甫がここで竹林の規模の大きさを誇っていることは注目に値する。⁽⁴⁾その竹林は、成都府の副長官である徐九が草堂を訪ねたときに「あなたは草堂の静けさを楽しんで雲にも届く竹林のすがたを眺める。賞静憐雲竹」と述べてその美しさを自慢し（「徐九少尹見過」0507）、また弟の杜占に草堂の管理を命じた（「舍弟占歸草堂檢校、聊示此詩」0696にも「東の竹林の密度が足りないならば、十二月には植え増しておきなさい。東林竹影薄、臘月更須栽」とあり（兩詩とも後述）、杜甫が大事にした竹林だった。

下記の詩にも、その竹林が述べられる。杜甫は草堂で老後を過ごすために堂を建て増すことにし、これまで大事にしてきたその竹林に入って「千本」もの竹を切り倒した。

營屋0806

我有陰江竹、能令朱夏寒。
陰通積水內、高入浮雲端。
甚疑鬼物憑、不顧剪伐殘。
東偏若面勢、戶牖永可安。
愛惜已六載、茲晨去千竿。
蕭蕭見白日、洶洶開奔湍。
度堂匪華麗、養拙異考槃。

草茅雖雜葺、衰疾方少寬。
洗然順所適、此足代加餐。
寂無斤斧響、庶遂憩息歡。

〔大意〕私には錦江を蔭うように茂った竹林があり、そこにいと眞夏でも涼しいほどだ。影は川底に徹するだけではなく、空の雲にも届きそうだ。この立派な竹林には精霊が寄り添っているのではないかと思つて、切り倒すことなど考えてもみなかった。ただ東側の造作に手を入れれば、家も住みやすくなるだろう。そこで草堂に住み始めて六年目に、意を決して千本の竹を切り倒した。すると静かに太陽も顔をのぞかせ、江の奔流も眼に入らなくなった。堂を造るといっても贅澤をするつもりはない。隱遁を樂しむのではなく、拙い我が生命を養おうと思うだけだ。茅を葺いただけの粗末なものだが、ここで休むことができれば病氣も好轉するだろう。欲を捨てて自分に合ったことをするのは、食べるものに氣をつけるのと同じ効果がある。竹を切る斧の音がやんだならば、その時はゆっくりと休んで寛ぐことにしよう。

永泰元年（七六五）杜甫は節度參謀の職を辭して草堂に歸り、草堂の増築に取り掛かった。ここを終老の地と思ひ定めて、竹林を切り拓いて東側に堂を建て増したのである。⁽⁵⁾草堂は、そこを離れる最後の時まで杜甫の理想の姿に近づけるべく修改築

が進められたことになる。それも草堂が、杜甫の理想を受け入れるだけの大きな容量を持っていたからこそ可能であった。

* * * * *

ところで草堂の造營の経緯について包括的に述べるのは、次の「寄題江外草堂」0650である。詩の原注に「梓州作、寄成都故居」とあるように、この詩が作られた廣徳元年（七六三）、杜甫は成都を離れて梓州・閬州の一带を放浪していた。

……

誅茅初一畝 茅を誅るに初めは一畝

廣地方連延 地を廣げて方に連延

經營上元始 經營するは上元に始まり

斷手寶應年 斷手するは寶應の年なり

敢謀土木麗 敢て土木の麗なるを謀らんや

自覺面勢堅 自ら面勢の堅なるを覺ゆ

臺亭隨高下 臺亭は高下に隨ひ

敞豁當清川 敞豁にして清川に當たる

惟有會心侶 惟だ會心の侶有りて

數能同釣船 數々能く釣船を同じくす

……

〔大意〕茅葺きの家造った当初は一畝の廣さだったが、敷地をどこまでも押し廣げた。上元元年（七六〇）に造營に着手して、工事が一段落したのは寶應元年（七六二）だった。構えの

杜甫の百花潭莊（松原）

豪華さを狙ったわけではないが、造作は手堅いものになったと思う。臺と亭は土地の起伏を考えに入れて配置し、視界が開けたところは錦江に面している。その場所で心の友とだけ連れ立って、何度も釣り船に乗ったものだ。

この詩によれば、草堂の造營は最初の三年間に集中的に行われて、寶應元年には基本工事が終っていた。（ただしその後も整備が續けられたことは、先の「營屋」0606にも明らか）。——ここではいくつかの點が注目されよう。草堂の敷地は相當に廣大だったが、しかし當初より整頓された土地ではなかったらしい。要するに、出來合いの莊園のようなものを取得したのではなく、未整備の土地を手に入れて開墾したものと推定される。またそのような未整備の土地（原野）であればこそ、杜甫が譲り受けることができたのであろう（筆者の推定では、西川節度使の裴冕が無償か格安で杜甫に提供した。参照：前稿）。

第二に、その草堂は、單に雨露をしのぐための住居としての茅屋によって占められるのではなく、臺や亭を地勢を勘案して隨所に配置した庭園として構成されていたことである。しかも草堂には、「惟有會心侶、數能同釣船」とあるように錦江に舟を浮かべて遊ぶための棧橋も用意されていた。⁽⁹⁾王維の輞川莊には舟を浮かべる畝湖があったように、⁽¹⁰⁾また鄭審の江陵「湖邊の宅」を杜甫が訪ねて舟遊びをしたように、⁽¹¹⁾また白居易

中國詩文論叢 第三十二集

の洛陽の履道里宅には池水を設けて舟を浮かべたように、庭園に望ましい條件として舟遊びの備えがあったことを思い出す必要がある。杜甫の草堂には、竹林あり、桃花あり、臺あり、亭あり、舟ありと、およそ庭園に備えるべきものが揃っていたことになる。

杜甫の草堂には、居住のための家屋の他に、臺も亭もあった。草堂はその敷地が広いだけではなく、建築についても、茅屋の稱から想像されるような質素なものではなかった。

落景下高堂、進舟泛迴溪。

誰謂築居小、未盡喬木西。……

〔沈溪〕0418)

杜甫は、草堂の建物の一部を「高堂」と稱している。高堂とは、「廣厦高堂」と連用されるように、規模の大きい建築を指す。杜甫の草堂は成都の西郊にあるので、夕日が沈む方角にある高堂はもとより成都城内のものではなく、杜甫の草堂である。そしてこの「高堂」が杜甫の自慢の材料であったことは、次句で、草堂には舟着き場があって直かに舟遊びができる好条件があることを述べ、次聯で「自分の住居が小さいと誰が言うのか、あの喬木の西まで行ってみたこともない」とその敷地の廣さを誇る文脈に連なることから明らかである。もう一首、家屋の規模に言及した興味深い作品がある。

萬里橋西宅、百花潭北莊。

層軒皆面水、老樹飽經霜。……

〔懷錦水居止二首〕其一(1088)

ここでは「層軒」の語に注目すべきだろう。層軒とは重屋であり、二階建て以上の樓閣である。それは平民が住む平屋に対して、富貴の者が住むいわば華屋であった。「層軒は皆な水に面す」、すなわち杜甫はその上階に登って、周圍を蛇行する錦江の流れを四面に眺め渡すことができた。杜甫はその時、眺望の愉悅に浸ったのであろうが、草堂は杜甫のそのような願いを叶えるだけの容量と可能性を持っていたのである。

(二) 百花潭莊

草堂が數千坪を超える規模を有していたことは確かな事實である。このことから推定すべきは、單に住宅を收容するだけの宅地ではなく、農業生産を行う「莊園」の機能を持っていたことである。杜甫が洛陽郊外に所有していた陸渾莊も莊園だった。王維の輞川莊、岑參の高冠草堂いずれも莊園の機能を持つものであり、詩人(士人)が郊外に構える住宅は莊園に併設されたものであるのが平均値である。そのことは、杜甫の草堂についても當てはまるだろう。

杜甫の草堂は、成都の西の郊外にあった。それは成都の狹隘な城郭の中ではなく、杜甫自身が言うように「西郊」0426に

「時出碧雞坊、西郊向草堂」、成都の城郭の西の郊外に位置していた。

南京久客耕、南畝、北望傷神坐北窗。

〔進艇〕0416)

成都に旅住まいの自分は南畝を耕し、北の窓邊で長安の方を眺めては心を痛める。——南京とは、玄宗が安祿山の亂を避けて成都に蒙塵したとき、ここを南京と稱したことを踏まえる。杜甫は、成都に久しく客遇して、農地を耕す。南畝とは、南に開けた土地が農耕に適することから轉じて、農地一般を指す。なるほど次の詩を見ると、杜甫の草堂には確かに農地があったものと思われる。

年荒酒價乏、日併園蔬課。

〔屏跡三首〕其一 0528)

不作なので酒代にも事缺き、日ごと農園の蔬菜から得たお金を掻き集める¹⁶⁾。——杜甫は農園で收穫した蔬菜を賣って収入を得ていた。とすれば、その農園は自給する以上の生産力を持っていた。しかも「課」とあるので、農園を耕す小作人から蔬菜の代價を徴収していたのであろう。士人である杜甫が、自ら耕作に従事することは考えにくい。草堂に農地があれば、それを小作させるのが當時の慣例であろう。鈴木虎雄注(續國譯漢文大成『杜少陵詩集』第二册四七二頁)に「年がらが凶作で酒かい錢は乏しく、はたけ仕事の日課を増してはたらく」と杜甫み

杜甫の百花潭莊(松原)

ずからの勞働と解釋するのは、草堂に農地があったことは認めるものの、小作人を必要としない小さな家庭菜園を想像していたためである。しかしこれも草堂は小規模のはずだという思い込みの致す解釋であろう。

從來、杜甫の草堂は狭小で、農地などはなかったと考えられてきた。例えば次の「大雨」0554は、前年の冬から雨が降らず、夏に入ってようやく雨が降ったことを喜ぶ詩である。

敢辭茅葦漏、已喜黍豆高。……

陰色靜壠畝、勸耕自官曹。

四鄰耒耜出、何必吾家操。

〔大雨〕0554)

わが茅屋が雨漏りするのはどうでも良いこと、黍と豆が育ったことが嬉しい。……曇り空のもと、田畑は穩やかに見える。このとき役人が野良仕事に取りかかれと觸れ回る。隣近所は鋤を持って田畑に出る。わが家が鋤を手取るまでもないのだ。

——難解なのは「何必吾家操」である。過去の諸注は、おおむねこの部分に解釋を加えない。韓成武ほか『杜甫詩全譯』(河北人民出版社、一九九七年)四五六頁には「四鄰の農民都扛着農具下田了、我雖沒有田地却同樣感到慶幸」、李壽松ほか『杜甫詩新釋』(中國書店、二〇〇二年)七一二頁には「四鄰都出來耕作、我家雖無田可種、但也爲農家得雨而欣喜」とする。兩者とも仇兆鰲『杜詩詳注』が「勸耕操耒、結出同慶甘霖意」と述

べるのを踏まえるが、注目すべきはどちらも「自分には田畑がないが」という『詳注』にはない解釋を追加していることである⁽¹⁷⁾。そしてこのことの中に、杜甫の浣花草堂には田地があるはずもないという漠然とした思い込みがあった。

「四鄰未相出、何必吾家操」（隣近所は鋤を持って田畑に出る。わが家が鋤を手取るまでもないのだ）について、別に可能な解釋があるとすれば、「四鄰」が杜甫の莊園の小作人であることを想定することになる。この觀點から詩を讀み直せば、第二句「喜黍豆高」は草堂の農園の光景となり、「已喜」も、近隣農民に對する同慶の思い、という回りくどい解釋を借りずとも、自分の農園の作物の生育を率直に喜ぶものと解釋する道が開かれるであろう。

杜甫の草堂には確かに農園があった、このような觀點から草堂の詩を眺め渡せば、詳注では「大雨」055bの次に置かれた「溪漲」055cに「青青屋、東麻、散亂床上書」とあるのも目に留まる。杜甫の茅屋の東側には、麻畑があったのである。

次の「舍弟占歸草堂檢校、聊示此詩」056は、廣徳元年（七六三）冬の梓州における作。このとき杜甫は蜀を去って長江を下ろうと計畫しており（實際には嚴武の成都再鎮を知って計畫は中止される）、それまで同行していた弟の杜占を遣わして主人不在の草堂の管理を委託した。

……

久客應吾道 久しく客たるは應に吾が道なるべし

相隨獨爾來 相ひ隨ふは獨り爾の來たるのみ

孰知江路近 孰かに知る江路の近きを

頻爲草堂迴 頻りに爲す草堂に迴るを

鵝鴨宜長數 鵝鴨は宜しく長に數ふべく

柴荊莫浪開 柴荊は浪りに開く莫かれ

東林竹影薄 東林竹影の薄ければ

臘月更須栽 臘月更に須く栽うべし

……

〔大意〕いつまでも旅の空にあるのは、自分の運命であろう。その自分に、ただおまえ杜占だけが付き従ってくれる。おまえは成都への近道を熟知しているし、もう何度も草堂に歸ってもいる。アヒルは何羽いるかいつも數えておきなさい。柴の戸は開けっ放しにしないよう氣をつけなさい。東の竹林が疎らならば、十二月には植え増しておきなさい。

杜甫は「鵝鴨」を飼っていた。今でも中國の農村で見かけるように、家禽の飼育は農家の生業の重要な部分であり、杜甫の草堂にはそのような世界があった。なおこの詩には、さらに興味深い消息が含まれている。杜甫は寶應元年（七六二）秋から廣徳二年（七六四）春までの約一年半の時間、草堂を離れて梓州・閬州の一帶を轉々としていたが、注目すべき第一點は、そ

の間に何度となく弟の杜占を草堂に遣わして點檢させていたことである（「頻爲草堂迴」）。杜甫は留守にしている草堂に、心配になるほどの財産を蓄えていたことになる。杜占には「鵝鴨」の飼育に注意を與えているが、鵝鴨がいたということは、杜甫一家が不在の時も草堂には鵝鴨の世話をする當番がいた證據となる。鵝鴨は杜甫の財産の取るに足らぬ一部であろうが、草堂には執事ともいふべき人物が常駐して、財産の管理をしていたことを推定すべきであろう。三年前に困苦して蜀道を越えて成都に辿り着いたときに杜甫がどれほどの財産を携えていたかを思えば、草堂の生活が杜甫にもたらした富の大きさを窺うことができる。

注目すべき第二點は、杜甫は年明けには聞もなく蜀を去ろうと計畫するこの段階になっても、茅屋の東側の竹林の見映えを氣にかけて、その整備を杜占に言い付けていることである。杜甫は、自分の離蜀後も草堂を放棄するつもりはなかった。この詩から読み取れるのは、草堂を保全し、將來とも杜家の財産として維持運営する意志があったということである。草堂は、杜甫が成都で暮らすときの一時的な假寓ではなく、自分が住むと住まぬとにかかわらず保有すべき大切な家産に數えられていた。

杜甫の草堂は、莊園を附帶するものであった。杜甫はその事實を認識して、詩に書き留めている。

杜甫の百花潭莊（松原）

懷錦水居止二首 其一 10848

萬里橋西宅 萬里橋西の宅

百花潭北莊 百花潭北の莊

層軒皆面水 層軒皆な水に面し

老樹飽經霜 老樹飽くまで霜を経たり

雪嶺界天白 雪嶺 天を界りて白く

錦城曛日黃 錦城 日に曛じて黃ばむ

惜哉形勝地 惜しい哉 形勝の地

回首一茫茫 首を回せば一に茫茫

〔大意〕萬里橋の西なる茅屋、百花潭の北なる莊園。層閣は四方に川に臨み、老樹は霜雪を経て遅しい。雪嶺は空にくっきりと白い稜線を描き、錦官城は夕日のなかにぼんやりと翳りゆく。その景勝の地を懐かしむ。しかし振り返ったところで、遠いかなたに隔てられた。

草堂の建物が「層軒」（二階建て以上の立派な家屋）だったことは、すでに指摘している。ここで注目したいのは「百花潭北莊」の詩句である。「萬里橋西宅」とは浣花草堂であるが、「百花潭北莊」が同じものを指すことは、「狂夫」(399)に「萬里橋西一草堂、百花潭北即滄浪」とあることから明らかである。

杜甫の浣花草堂は、竹林も桃花もあり、高樓も臺も亭もあり、

周囲の錦江の流れを取り込んだ一箇の庭園だった。もっとも草堂の實態は、當時の士人たちの莊園の平均値から勘案するならば、莊園の生産機能を基盤にして、庭園としての趣味性を加味したものと云うほうが正確であろう。草堂が莊園としての實質を備えていたことは、杜甫自身の「百花潭北の莊」というこの言い方の中に明らかな通りである。

(三) 資金の工面

草堂は、杜甫の大きな財産となっていた。しかしこのことは、杜甫が草堂に住まって、左團扇で暮らしを樂しむことができたことを意味してはいない。在蜀の期間を通して草堂は整備途上であり、次々と新規の投資を必要としていた。杜甫には、それを自力でまかなう資力はなかった。杜甫は周囲の人々の援助をいつも必要としていたのである。

草堂の敷地は裴冕によって供與された(前稿)としても、裴冕は間もなく成都を去っているので追加の援助は期待できなかった。差し迫っては雨露を凌ぐ茅屋が必要であり、これには茅屋を造る資金を提供した王十五司馬の働きが大きかった(「王十五司馬弟出郭相訪兼遺營茅屋貲」0386)。しかし茅屋の周りに廣がる土地も整える必要があった。草堂全體の造營が三年越してあったことを思えば、草堂に移居した夏以降も物入りの情況が續いていたことになる。以下の詩篇は、その邊の事情を物語る。

行李須相問、窮愁豈有寬。

君聽鴻雁響、恐致稻粱難。

〔重簡王明府〕(0493)

王明府よ、あなたには使いの者を寄越して是非この私を見舞って欲しいのだ。貧乏暮らしの中で私がどうして寛ぐことができようか。聞きたまえ、雁が鳴く聲を。きくと稻粱の餌を手に入れることができないで悲しんでいるのだ。——草堂で二年目の冬の作。王明府は唐興縣の縣令である王潜で、杜甫はこの年の秋に彼のために「唐興縣客館記」を作っている。杜甫はいわばこの作文の見返り(潤筆料)として、この詩で經濟的援助を求めた見ることでもできよう。杜甫に援助の手を差し伸べてくれる者には、このような成都近隣の縣令や縣尉が多かった(草堂に植栽を提供したのも彼らだった。注2参照)。

また草堂がいったん落成した後も、修繕やら増改築のための費用は必要になる。杜甫は、そのための持續的な援助も成都の人々に期待していた。杜甫は、梓州・閬州の一年半の漂泊から成都に歸ったときに不在の間にほころんだ草堂の修繕に取り掛かるが、その修繕費用の一部を成都府の録事參軍だった王某に請求している。

爲曠王錄事、不寄草堂貲。

昨屬愁春雨、能忘欲漏時。

〔王錄事許修草堂貲不到聊小詁〕(0498)

王録事よ、私はあなたが草堂のための費用を送ってこないことに腹を立てているのだ。昨日はたまたま春の雨が降って心を痛めることになった。茅屋が雨漏りがしそうなことをよもやお忘れになったのではありますまいに。

* * * * *

ただ録事參軍や、縣令・縣尉クラスでは、支援の額にも自から限界があるだろう。また何よりも、成都一圓で「名士」としての地位を確立するためには、成都府の中心と連絡を付ける必要がある。杜甫は、この点にも配慮を怠らなかつたと言うべきであろう。標的となるのは、成都府の内部で實權を握る高官たちである。成都府は、京兆府（長安）・河南府（洛陽）・太原府（唐朝發祥の地）について、玄宗の蒙塵とともに府に格上げされた。長官は牧（從二品）、しかし多くは缺員とされ、實質的には尹（從三品）が長官の職に當つた。その副官が少尹（從四品下）である。

まず長官である成都尹について見れば、友人の嚴武が成都尹に着任するのは上元二年二月（任命は一〇月）、これ以前の成都尹は、裴冕（乾元二年六月〜上元元年三月）、李若幽（上元元年三月〜上元二年二月以前）¹⁸、崔光遠（上元二年二月〜同年十月）と三人が交替している。しかし同時期の杜甫の詩には、裴冕・李若幽・崔光遠との交際に言及するものはない。

とはいえ、彼らとの交際がなかつたかどうかは細心の判断を

杜甫の百花潭莊（松原）

要する。裴冕とは、ほぼ確實に成都における交際があつた。⁽²⁰⁾

また崔光遠と杜甫は、鳳翔の行在所で結識している。肅宗の行在所に駆けつけた杜甫は、忠義を賞されて左拾遺を授けられるが、杜甫は就任早々に、房琯が宰相を罷免されたことに抗議して諫言し、肅宗の逆鱗に觸れる。尚書省の刑部・御史臺・大理寺の三司合同の査問委員会にかけられて、極刑の可能性もあつたが、宰相張鎰・御史大夫韋陟、また崔光遠や顔真卿等の辯護によってかろうじて許されることになる。この意味で崔光遠は杜甫の知己にして恩人であり、崔光遠が成都尹に赴任してきたときに、杜甫が進んで接觸した可能性はきわめて高いと推測される。しかしどうしたわけか杜甫には、裴冕・崔光遠との交際を記す詩が残っていない。これもまた推測に過ぎないが、裴冕・崔光遠ともに肅宗朝の元勳として、今は一介の浪人である杜甫との地位の隔たりは余りにも大きく、氣安い交際をひけらかすことは雙方の関係においても、また成都府中の官吏たちとの関係においても得策ではないと杜甫が判断したためだったかもしれない。これに對して、成都で初めて知り合った「少尹」たちに遠慮は不要であつた。むしろ杜甫は「成都に流寓する高士」の自畫像を掲げて、矜持をもって交遊することこそ必要であつた。

ここで留意したいのは、裴冕や崔光遠が背後で果たした役割である。成都尹の裴冕や崔光遠が杜甫と舊知の関係にあること

は、少尹（副長官）たちには有形無形の影響を與えたと見るべきだろう。杜甫が成都に到着して程なく、草堂の造營に際して「王司馬が同調して杜甫を助け、蕭・韋の二人の明府や、何・韋の二人の少府も桃や榿の苗木を採って持って来てくれたのも、恐らく上官斐冕の意を伺ったためであろう」（陳貽燾『杜詩評傳』中卷、六四三頁、上海古籍出版社、一九八八年）という推測は、斐冕ばかりではなく、崔光遠の場合にも應用できるものである。上元二年（七六一）秋の作に、成都府少尹の陶某・王某に寄せた「赴青城縣、出成都、寄陶・王二少尹」⁽²⁰⁾があり、詩中に「老被樊籠役、貧嗟出入勞。客情投異縣、詩態憶吾曹」（老いても旅先の不自由に拘われて、貧しさのために驅けずり回る。生活のためにいま青城縣に向くのだが、あなた方の卓れた詩が思い出される）とある。このときに杜甫が成都の北西約五〇キロの青城縣（青城山）に何を求めに出かけたのかは、前後に作られた詩を見渡しても不明であるが（青城山で靈藥の採取？）、「貧嗟出入勞」の詩句から、それが金策の一環であることは確かである。今それよりも注目したいのは、第一に、陶某と王某という成都府の二人の少尹に援助を申し入れていることであり、第二に、「詩態憶吾曹」の詩句から、杜甫はその二人の少尹と詩會の場で知り合っていると推測されることである。——成都府の少尹は、定員が二名である。⁽²¹⁾その詩會に二名の少尹が揃って出席していたということは、上級者つまり成都尹が主催する

詩會を想定して良いであろう。この詩の制作は上元二年（七六一）秋なので、成都尹は崔光遠である。この推測の通りであるとすれば、成都尹崔光遠が主催する詩會に、副官である二人の成都少尹はメンバーとして参加し、そこに杜甫が客分として連なっていた。このようにして知り合った二人の成都少尹に、後日、杜甫は經濟的援助を願ひ出たことになる。

成都府少尹の陶某・王某が、杜甫の期待するような援助を提供したかどうかは不明である。しかし同じく成都少尹だった徐九の場合⁽²²⁾、彼は相當の禮物を携えて杜甫の草堂を訪ねている。

徐九少尹見過⁽²³⁾

晚景孤村僻 晚景 孤村僻なり

行軍數騎來 行軍 數騎來たる

交新徒有喜 交はり新たにして徒らに喜ぶ有り

禮厚愧無才 禮厚くして才無きを愧づ

賞靜憐雲竹 靜を賞して雲竹を憐れみ

忘歸步月臺 歸るを忘れて月臺に歩む

何當看花蕊 何か當に花蕊を見るべき

欲發照江梅 發かんと欲す江を照すの梅

〔大意〕夕日の中で、郊外の村は一層ひなびて見える。行軍司馬の供回り數騎がやって來た。近頃あなたと識り合いになれてただ嬉しがっているばかりだ。手厚い禮物を頂戴して、自分の

ような才能のない者は慚愧に堪えない。あなたは草堂の静けさを楽しんで、雲にも届く竹林を眺め、歸るのも忘れて、月下の臺をそぞろ歩く。何時になったら草堂の花を見に来てくれますか。そろそろ梅の花が開いて、錦江に美しく映える季節になります。

繰り返せば、成都府少尹は地方行政の大官である。しかも「行軍數騎來」の詩句によれば、彼は西川節度使（成都尹の崔光遠が兼務）の幕職官である行軍司馬を兼務していた。このような有力な立場にある者が支援者となることは、成都に暮らす杜甫には心強いことであろう。

この詩には、二つの注目点がある。第一に「禮厚くして才無きを愧づ」と逆説的には述べられているが、徐九が「禮厚（十分な禮物）」を携えて草堂を尋ねた理由が、杜甫の「才（詩才）」に惹かれたためだったこと。杜甫の詩名は、成都府の官僚組織の中央まで聞こえていた。また第二に、そして當時の杜甫の文學を考える上でより重要な意味を持つのは、その詩名が草堂と一體のもだったこと、つまり「草堂の詩」が評判となっていたらしいことである。このような推測の根據は、詩の後半に展べられた草堂の美しい描寫である。杜甫は草堂の景觀の魅力を「雲竹」「月臺」「花蕊」の三點に要約した。雲を拂うように高く伸びる竹林、月光を浴びる露臺、川面に影を落とす梅花、杜

杜甫の百花潭莊（松原）

甫は草堂の中を一つ一つ案内して回り、成都府の副長官もそのたびに深く頷いている有様を想像してみる必要がある。その草堂の美しいたずまいが副長官の足を引き留め、次なる來訪へと誘うのである。それは草堂の造營に丹精込めている杜甫の自己満足とばかりは言えない。むしろ「草堂の詩」に描かれた世界をおのが目に確かめようとやってきた副長官に對する、主人の心づくしの持て成しと理解するのが適當だろう。

成都府少尹という大官が、供回りの騎兵を従えて一介の浪人が住まう郊外の草堂を訪れるのは、一つの事件である。この事件についての可能な解釋は、杜甫がすでに當地の名士であり、彼を訪ねることが成都府の副長官の雅量を示すのに悪くはない選擇肢となっていたということである。杜甫はつい先程までは未知の世界に過ぎなかった成都において、いつしか名士の座についていたのであり、その名士の評判が周囲の人士たちを惹き付け始めていた。杜甫は、美しい草堂の住人となり、それまでも見たことのないような海内を驚かす「草堂の文學」を作ることによって、名士としての評價を手に入れつつあった。

結語―懶惰と疏放と狂―

杜甫の文學を考える上で、「浣花草堂」「百花潭莊」の事實を指摘することは問題の入り口に過ぎない。より重要なことは、豊かな「百花潭莊」の實態を隠蔽するかのよう「草堂の文學」

が作られているというもう一方の事實である。その意味で興味深いのは、草堂の廣さを「有竹一頃餘」と描いた「杜鵑」0861も、草堂の實態を「百花潭北莊」として明かした「懷錦水居止二首」其、1088の詩にしても、すでに草堂を離れた後に作られていることである。「草堂の住人」を演じる必要がもはや過去のものとなったときに、杜甫は安心して「草堂の豊かさ」を語り始めたのである。杜甫はなぜ「草堂の文學」の中で、「草堂の豊かさ」を語ろうとはしなかったのだろうか。

杜甫は草堂に住まい、ただ黙々と詩を作っていたのではない。このときの杜甫にすれば、詩は生活を立てるための限られた手段であり、そのためにも如何なる詩を、如何なる人々に伝えるかを思案しなければならなかった。當時、作詩（讀詩）層はほぼ官僚士人層に限られている。詩を伝えようとするなら、成都の官僚たちが集まる詩會に直接出向いて自作の詩を披露するのが效率的である。また成都で實權を握っている彼らと面識を持つことは、彼らから援助を引き出すためにも都合である。

これが杜甫の戦略となった。杜甫が成都で生計を立てるための元手は、肅宗の朝廷で左拾遺という名譽ある供奉官に就いたことと、詩人としての評判の二つである。しかし杜甫はいま官職を離れて左拾遺は過去の名聲に過ぎず、これだけに頼るわけにはいかない。杜甫には、成都の人士からの援助を取り付けるためにも、彼らの間で一目置かれる名士としての地位を築く必

要があった。——杜甫が考案したのは、成都の郊外に隱遁する高士になりすますことである。その人は、かつて供奉官として肅宗のお側近くに仕えたこともあったのだが、今は成都の鄙びた郊外に茅屋を構えて住まい、清貧の生活の中で、これまで誰も見たこともないような眞新しく「蕭灑」なる詩を作っている。杜甫が周囲に向けて発信しようとした消息とは、多分このようなものであった。「草堂の文學」はその目的を實現するために設計された新しい様式だったのである。^{*}

* 「草堂の文學」はその目的を實現するために設計された新しい様式だったと説明するとき、その文學があたかも眞實を含まない作爲の産物であると理解される可能性がある。そうした「理解」の根柢にあるのは、作品は作者の唯一無二の反映であると見る、余りにも自然主義的な作品観である。しかし作品が作者の反映であることは眞實であるとしても、その間には、複数の選擇肢の中から最も効果的な一字一語を選擇するのと同様の、最も効果的な表現方法の選擇という關門が介在していることを承知する必要がある。

草堂の文學といっても、杜甫の在蜀は六年余りになる。このうち草堂を留守にした梓州・閬州漂泊期の一年半のを除いたとしても、四年半の草堂在任期の文學は、一括して論じられるほどに單調なものではない。今ここで「草堂の文學」と呼ぶのは

草堂在住の前期、特に嚴武が成都に來鎮するまでの上元二年（七六〇）春から上元二年冬までの二年間の文學のことである。この時期、杜甫は特定一人の支援者に頼ることなく、自己の才覚で生活を切り拓こうとしていた。草堂の文學は、その中で編み出されることになる。

草堂は敷地も十分に廣く、造られた建物も決して貧相なものではなかった。この時期の杜甫には、未完成の草堂を如何に經營するかという苦勞はあったとしても、それは衣食の苦勞と同じものではなかった。しかし歴代の杜詩の讀み手たちは、漂泊の末に成都にようやくたどり着いた杜甫が、たちまちに豊かな生活の基盤を手に入れたことを想像してもみなかった。

しかしより肝要なことは、杜甫自身が讀者をそのような誤解へと誘導したことにある。杜甫はあたかも自らを裕福に見せることを警戒するかのように、ことさらに質素な生活ぶりを演じて見せた。このために讀者は、草堂の規模を實態よりもはるかに小さいものと思ひ込むことになった。杜甫がそのために描いた自畫像とは、郊外の鄙びた農村の中に住まって「懶惰と疏放と狂」という自由な生活に耽る人物のそれであり、その姿を際立たせるためにしばしば貧苦の自嘲も加味された。だからその貧苦は、自畫像を完結させるための意匠であって、真相ではなかった。「草堂の文學」は、このような方針に従って作られることになる。

杜甫の百花潭莊（松原）

なお草堂の文學を論ずることは本稿の範圍外にあるので、簡単な見取り圖を示すことに止めたい。「懶惰」を主題とする詩から「堂成」「屏跡三首、其二」の二首を掲げる。

堂成(393)

背郭堂成蔭白茅	郭に背きて堂成れば白茅を蔭ひ
緣江路熟俯青郊	江に緣りて路熟せば青郊に俯す
椋林礙日吟風葉	椋林は日を礙る風に吟ずるの葉
籠竹和煙滴露梢	籠竹は煙に和す露を滴らすの梢
暫止飛鳥將數子	暫し止まるの飛鳥 數子を將る
頻來語燕定新巢	頻りに來るの語燕 新巢を定む
旁人錯比揚雄宅	旁人 錯りて比ふ揚雄が宅
懶惰無心作解嘲	懶惰にして解嘲を作るに心無し

〔大意〕成都の郭外に草堂を造って茅の屋根を葺いた。川沿いの道は踏み固められて緑の郊野が眺められる。椋林は日を蔽うように茂って葉は風にそよぎ、竹林は靄を帯びて葉末から露が滴る。鳥は子供を従えてしばしば枝に止まり、燕は新たに巢を架けようとしてしきりに飛び回る。周りの人は我が草堂を揚雄の家を引き比べるのだが、しかし揚雄とは違って「解嘲」を作って自分の怠惰の言い譯をする氣力もないのだ。

前漢の揚雄は、故郷の成都に居を構えていた。かつて『易經』

中國詩文論叢 第三十二集

を真似て『太玄經』を著し周圍から失笑されたとき、あえて言
い譯のために「解嘲」（嘲りを解く）の文章を作った。しかし
杜甫は「草堂の文學」を作って嘲りを受けても、懶惰の余り、
言い譯をする氣力すら湧いてこない。

屏跡三首 其二(0390)

晚起家何事 晚く起きて家に何事かある

無營地轉幽 營む無くして地は轉た幽なり

竹光團野色 竹光 野色に團まり

舍影漾江流 舍影 江流に漾ふ

失學從兒懶 學ぶを失して兒の懶なるに従せまか

長貧任婦愁 長に貧なれば婦の愁ふるに任す

百年渾得醉 百年 渾て醉ふを得ん

一月不梳頭 一月 頭を梳らず

〔大意〕遅く起き出したのは、家にこれといってやることがないためだ。齷齪と働くことがないので、地はいよいよひっそりと静まりかえる。竹林が、野面にこんもりと茂り、家屋の影が川の流れに漂う。勉學をしなくとも子供が怠けるのに任せ、いつもお金がないので婦が困り顔なのも相手にしない。一生のあいだ酒に酔っていたいものだ、もう一カ月も髪に櫛を入れていない。

杜甫は、物ぐさで貧乏な人物を演じきろうとする。何もやることがないので朝寝坊を決め込んで、だらしなく髪もとかさない。子供の教育もさぼって好き勝手に遊ばせ、家計に難儀する奥さんを見て見ぬふり。杜甫は、社會的活動から全く手を引いて、隱遁するのである。杜甫は美しい草堂の世界に耽溺して懶惰にならずみ、その結果である貧苦を甘んじて引き受けようとする。要點は、貧苦を訴えることにあるのではなく、貧苦を致すほどに懶惰であること、つまり世間の羈束から完全に自由であると自慢することにある。

「懶惰」が行き着くところは世俗の規律からの逸脱であり、杜甫はその状態を「疏放」「狂」と稱した。これを中庸の言い方に改めるならば、「完全な自由」となるであろう。

狂夫(0399)

萬里橋西一草堂 萬里橋西 一草堂

百花潭水即滄浪 百花潭水 即ち滄浪

風含翠篠娟娟淨 風は翠篠を含みて娟娟と淨く

雨裏紅蕖冉冉香 雨は紅蕖を裏うらして冉冉と香る

厚祿故人書斷絕 厚祿の故人 書斷絶

恆飢稚子色淒涼 恆飢の稚子 色淒涼

欲填溝壑惟疏放 溝壑を填めんと欲するも惟だ疏放

自笑狂夫老更狂 自ら笑ふ狂夫は老いて更に狂なりと

〔大意〕 萬里橋の西にある一軒の草堂、その畔りを流れる百花潭こそ隠者の住まう滄浪の水だ。風は緑の竹を吹いて、さらさらと清らかに響き、雨は紅い蓮の花を濕して馥郁と匂い立つ。高祿を食む友人からは便りも途絶え、いつも腹を空かせた子供らはうらぶれた姿だ。野垂れ死にしようだというのに、自分は疎放に勝手氣まま、自分でも「狂夫」は年を取っていいよよ度が過ぎてきたと苦笑している。

杜甫の草堂は、かつて世を逃れた漁父が住んだ滄浪の流れる岸邊にある。杜甫はこう言い切って、自分は隠者であると宣言する。その草堂は隠者の住いらしく慎ましいものでなければならず、杜甫の「一草堂」は、「萬里橋」という極大の空間を包み込む語と向かい合って、微塵のようにささやかな存在となる。この草堂の隠者は、世間の規律に背を向けるように「疏放」であり「狂」であり、その結果として世間に見放されて貧乏に苦しめられる。——しかしかりに「厚祿の故人」が彭州（成都の北約四〇キロ）刺史の高適であってもよい。彼がこの詩を受け取ったときに「恆飢稚子色淒涼」に、また「欲填溝壑」に杜甫の差し迫った貧苦を讀み出すであろうか。おそらくはその逆であり、この詩の大げさでおどけた身振りから、杜甫の生活が順調であることを知って安心するに違いない。ここにあるのは、草堂を満す優しい空気を呼吸して、完全な自由を謳歌する、幸

杜甫の百花潭莊（松原）

せな人間の姿である。

「草堂の文學」がそこに魅力的な高士の姿を描き出したことによって、杜甫は成功した詩人となり、彼みずから高士となった。杜甫はこの新しい文學を携えて詩會に登場し、成都の人士をたちまちに惹き付けることになるのである。

【注】

- (1) 高木正一『杜甫』中公新書、一九六九年に「茅ぶきの簡素な家と庭が一應形を整えたのが、暮春三月のころである。狭いながらも一軒、自分の住家を持ちえたことは、杜甫にとってこの上もなくうれしく、楽しいことであったにちがいない」（一三三頁）。また鈴木修次『杜甫』人と思想、清水書院、一九八〇年に「杜甫は、翌年、上元元年の春、浣花里にささやかな草堂を造って、家族ともどもそこに住むことになった」（一五八頁）。
- (2) 「王十五司馬弟出郭相訪兼遺管茅屋贊」0386、「蕭八明府實處覓桃栽」0388、「從章二明府續處覓綿竹」0388、「憑何十一少府邕覓椴木栽」0389、「詣徐卿覓果栽」0392。
- (3) 「又于韋處乞大邑瓷碗」0391。大邑は、成都の西約五〇キロ。
- (4) 草堂の外部に廣がる竹林を指した可能性もあるが、「結廬錦水邊」を直接受ける文脈であることを考慮すると、草堂内部の竹林と理解するのが穩當。

中國詩文論叢 第三十二集

- (5) しかしそれから數カ月もしないうちに、杜甫は俄かに草堂を離れて長江を下る旅に出る。それは嚴武の仲立ちで朝廷から授けられた工部員外郎に就任するためと推定される。参照：陳尚君「杜甫の離蜀後の行跡に關する考察」、研文出版『生誕千三百年記念・杜甫研究論集』二〇一三年所收。
- (6) 莊園が賣買された事例に、王維による宋之問の輞川莊の購入がある。
- (7) 樓臺か露臺か、あるいは兩方を含むか不明。「徐九少尹見過」0507の「忘歸步月臺」とある「月臺」は月を眺めるための露臺である。
- (8) 「江亭」0450に「坦腹江亭暖、長吟野望時。水流心不競、雲在意俱遲」とあるのは、錦江に面して亭が置かれたことを示す。
- (9) 「江上植水如海勢、聊短述」0491に「新添水檻供垂釣、故著浮槎替入舟」。
- (10) 王維「輞川集」の「南垞」に「輕舟南垞去、北垞森難即。隔浦望人家、遙遙不相識」。
- (11) 杜甫「暮春陪李尚書季中丞、過鄭監湖亭泛舟」1315。
- (12) 白居易「引泉」2279に「竟夕舟中坐、有時橋上眠。何用施屏障、水竹繞床前」。
- (13) 杜甫が草堂の家屋を「茅屋」と稱した例に「茅屋爲秋風所破歌」0487「將赴成都草堂途中有作、先寄嚴鄭公、五首」其1 0732「得歸茅屋赴成都」、「春日江村五首」其1 0808
- に「茅屋還堪賦」。
- (14) 王維「積雨跼川莊作」に「漠漠水田飛白鷺、陰陰夏木囀黃鸝」。岑參「因假歸白閣西草堂」に「幸有數畝田、得延二仲蹤」。
- (15) 「成都府」0383に「曾城填華屋、季冬樹木蒼。喧然名都會、吹簫聞笙簧」と述べて、城郭の中に所狹しとひしめく街並みを形容する。
- (16) 仇兆鰲『杜詩詳注』卷一〇に「日併賣蔬課錢、以充沽酒之價」。
- (17) 鈴木注(第二册五一頁)は「あたり近所からみんな未をとるものが出だした。吾が家のものがそれを手にしだしたばかりではない」。鈴木の解釋であれば、原文は「何獨吾家操」のようであればならず、明らかに行き過ぎた解釋である。鈴木がこのような無理な解釋をしたのは、前述のように、草堂には家族の耕す小さな家庭菜園があるだけだという思い込みのためである。
- (18) 李若幽の成都尹離任の時期は不明確。就任については「乾元三年、改元して上元元年」三月壬申、以京兆尹李若幽爲成都尹・劍南節度使(『新唐書』卷一四〇「裴冕傳」)。離任については後任の崔光遠について「上元二年二月」癸亥(八日)以鳳翔尹崔光遠爲成都尹・劍南節度支營田觀察處置等使(『舊唐書』卷一〇「肅宗本紀」)の記事があるので、上元二年二月以前であることは確實。黃鶴『補注杜

杜甫の百花潭莊（松原）

- 詩」年譜辨偽には「上元二年辛丑、是年二月李若幽入爲殿中丞、癸亥以崔光遠爲成都尹・劍南節度使」とあるが、何に基づくか未詳。
- (19) 「戲作花卿歌」0496に「子璋擲鞭血模糊、手提擲還崔大夫」とある「崔大夫」が崔光遠を指すのが唯一の言及例。ただしこれも杜甫との交際を示さない。
- (20) 同谷成都紀行詩二一首の中の成都到達を間近に控えて作られた「鹿頭山」0382に「冀公柱石姿、論道邦國活。斯人亦何幸、公鎮踰歲月」（冀國公は國家の柱石、道理を語って、國は平和に治められる。この土地の人々は、何と幸いなことか。あなたがここを治めて、もう一年余りにもなるのだ）と賛美された「冀公」とは、冀國公の裴冕を指す。この詩は、成都で裴冕に干渉することを目的に制作されたことはほぼ間違いない。参照：松原「杜甫と裴冕―成都草堂の造營をめぐる一つの覺書―」『專修人文論集』九二號、二〇一二年。
- (21) 『舊唐書』卷四四「職官志三」に「京兆・河南・太原等府、三府牧各一員、尹各一員、少尹各二員」とあって成都府もこれに準じて少尹の定員は二名であろう。
- (22) 成都少尹の定員は二名なので、陶某・王某の二人の成都少尹が登場する「赴青城縣、出成都、寄陶・王二少尹」0480、この「徐九少尹見過」0507は同時期のものではない。
- (23) 草堂で作られた「賓至」0388に「幽棲地僻經過少、老病人扶再拜難。豈有文章驚海內、漫勞車馬駐江干。……」。
- (24) 「自京赴奉先詠懷五百字」0199に「非無江海志、蕭灑送日月。生逢堯舜君、不忍便永訣」（江湖の世界に住まって脱俗高踏の生活を送る思いがないわけではないが、堯舜のような名君の治世に生まれ合わせたので、皇帝のもとを去る決斷がつかない）とある。しかし前年に華州司功參軍を強いられて罷官したとき、杜甫は「生逢堯舜君、不忍便永訣」の思いを斷ち切り、消去法に従って「江海の地で、蕭灑として日月を送る」ところに活路を求めるしかなかった。華州司功參軍罷官の事件とそれが杜甫に與えた影響については、松原「杜甫の華州司功參軍時期についての覺書―併せて閻琦・王勳成の免官説の検討―」（『中國詩文論叢』第三〇集、二〇一一年）、同「杜甫の「詩の死」―そして秦州における詩の復活―」（中國詩文研究會編『生誕千三百年記念・杜甫研究論集』研文出版、二〇一三年）を参照。
- (25) 杜甫の蜀中の生活は、嚴武の來訪によって一變する。嚴武來鎮より後は、杜甫の草堂の生活は自律性を失って、嚴武との関係によって規定されることになる。それは経済的な庇護者の出現という意味合いだけではなく、嚴武の仲介によって、斷絶していた杜甫と中央政界との関係が回復する可能性を持ったためである。参照：松原「杜甫の望郷意識（上）―蜀中前期」（『中國詩文論叢』二二集、二〇〇三年）。